

Interview

文部省の「英語指導改善懇談会」座長・中嶋嶺雄東京外国語大学長

小学校から英語教育

会話重視、大学入試も論議

21世紀は国際化、情報化が飛躍的に進む社会となり、教育現場でもそれに対応した学習が必要となってくる。世界の人々と交流し、情報を得るためにも「言葉」、とりわけ共通的な言語である英語を学ぶことが欠かせない。先ごろ、21世紀日本の構想懇談会が「英語を

第二公用語に」と述べて注目され、文部大臣の私的諮問機関「英語指導方法等改善の推進に関する懇談会」は、小学校一年生からの英語教育——を提言する方向だ。そこで、同懇談会の座長である中嶋嶺雄・東京外国語大学学長に、何が論議されているのか聞いた。

「英語指導方法等改善懇談会」座長
東京外国語大学学長

中嶋 嶺雄氏

聞き手／本誌編集主幹

山田 隆三

(6月9日、東京外国語大学学長室)

知的国際貢献にも英語が必要

——文部大臣の私的諮問機関である「英語指導方法等改善の推進に関する懇談会」が近く、「中間のまとめ」を出すと聞いております。それには、小学一年生から英語教育を行うことが有効——という提言が盛り込まれる

Interview

学校法人 日本大学第一学園



理事長 加納 弘

一校 訓

真：知識を豊富に心に刻み人生を拓く

健：鍛錬に堪えて充実した力を持つ

和：人間としての幅と深みをつちかう



日本大学第一高等学校 (男女共学) 〒130-0015 東京都墨田区横網1-5-2
TEL 03-3625-0026
日本大学第一中学校 (男女共学)



千葉日本大学第一高等学校 〒274-0063 千葉県船橋市習志野台8-34-1
TEL 0474-66-5155
千葉日本大学第一中学校 (男女共学) (千葉日大一高1-1中校内)
千葉日本大学第一小学校 (男女共学) TEL 0474-63-6621



中嶋 嶺雄氏

1936年、長野県松本市生まれ。東京外国語大学中国科卒業。東京大学大学院国際関係論修士課程修了、東京大学社会学博士。勸世界経済研究所研究員、東京外国語大学教授、オーストラリア国立大学、パリ政治学院、カリフォルニア大学サンディエゴ校大学院各客員教授。1995年9月、東京外国語大学学長、同大学院地域文化研究科長に就任。現在、国立大学協会副会長、大学審議会大学院部会特別委員、大学入試センター評議員、アジア調査会研究委員代表、才能教育研究所常任理事。『北京烈烈』＝筑摩書房、『中國の悲劇』＝講談社、『香港回帰』＝中央公論社など著書多数。東京都北区西ヶ原4-51-21 (☎03-3917-6111)

との新聞報道がありました。先生は懇談会の座長として二十二人の意見を集約するお立場ですので、今後の英語教育についてどのような考えをお持ちでしょうか。それから、小淵前首相の私的懇談会である「21世紀日本の構想懇談会」が、将来は英語を日本語に次ぐ第二公用語にすべきだという提言もあります。やはり、国際化、情報化の中で、世界の共通語的な言語である英語の教育は重要との認識が高まっているのだと思います。

中嶋 私どもの懇談会は、「英語指導方法等改善」を

うたっている通り、英語の教育の仕方に関係があるのでないかということが大きなテーマで、それは、私自身も痛感しております。日本がこれからの21世紀に何をすべきか——特に高等教育に携わっている者からすると、一番重要なのは国際貢献だと思っております。国際貢献には安全保障の分野もありますし、ODA（政府開発援助）などの経済援助もありますが、一番重要なのは知的な国際貢献です。そういう視点で考えてみると、国際貢献するには、ツールとしての言語、特に外国語、なにかんずく

英語の運用能力を身につけなければ、とても国際貢献はできないという考えが一つの流れとしてあります。

もう一つの流れは、今までの英語教育のあり方が、どちらかというとりーディングを中心とする「読解」で、それを全面否定するわけではないですけれども、中学校から大学まで英語を勉強していても、外国人と出会うと言葉が出てこない。そのような英語教育でいいのか、ということがあります。ですから、もっと実践的な英語教育にしなければいけない。この二つの大きな流れを考えると、いずれも早く一つの方向を打ち出して改善しなければいけないということから、中曽根文部大臣ご自身、時間が許す限り毎回のように出席されていて、文部省としても非常に熱心に取り組んでいます。この懇談会が初等中等教育局所管でできたということは、小学校、中学校あたりからこの問題を根本的に考え直してみたいという文部省の意向もあります。

我々が取り組んでいる「英語教育の改善」と、いわゆる小測驗談会が出した「英語を第二公用語にするかどうか」ということは一応、切り離して考えないと問題が混乱します。英語第二公用語化論については、私なりの意見も持っておりますけれども、公用語というのは、多民族、多言語社会においてどれを指定の公的言語にする

か、ということなのです。日本は一元的な言語環境にありますので、英語を公用語にということ自体、定義の仕方にも問題があるので、慎重に論じるべきだと思います。けれども、私自身は、とにかく日本人はもっと発信する能力、外国語でのコミュニケーション能力を持たなくてははいけないし、そのためには共通語としての英語は非常に大事だという立場です。

ついでにお話ししますと、懇談会にはそれぞれの分野の専門家が入っておりますので、毎回議論が沸騰します。やはり、どれが正しいとすぐに言えない問題もありますし、皆さんが自分の価値観を持っていきますから、甲論乙駁、ある意味では百年議論しても、しつくせないような問題を含むんですね。けれども、21世紀はすぐ目の前に来ていますので、みんなが異議ないということは、すぐ政策化する方向で提言をしようと考えていまして、間もなく中間まとめが出る段階です。その後、各界のヒアリングをしまして、この秋には報告をまとめることにしています。

小学校でユニークな英語教育

——二〇〇二年度から改訂される新しい学習指導要領

によって、小学校から高校まで「総合的な学習の時間」が設けられます。今年から小中学校では移行措置として総合学習が始まっておりまして、この時間を英語教育に充てる小学校もあるようです。

中嶋 新学習指導要領に英語教育をどう対応させるかは、具体的な施策の問題でもありません。ただ、新聞が「小学校一年生からの英語教育を提言」という書き方をしましたけれども、総合学習の時間は制度的には三年生からなんです。一方、現に、国際理解教育としての英語を取り入れているところが多いですし、私立の小学校などでは英語教育をずっとやっていて、効果が上がっています。

私の郷里（長野県松本市）に近い波田町立波田小学校で、「松風プラン」と呼ぶ独自のカリキュラムを編成しています。その中にユニークな国際理解教育が組み込まれています。そのことが地元の「市民タイムス」という新聞に「生きた英語、伸び伸び」という記事で紹介されました。懇談会の皆さんや文部省の関係者にコピーを配りました。これは、ニュージーランド人の講師が子供たちと、先住民・マオリ族の遊びをしながら英語に親しむといったように、非常にうまくいっているケースです。そういう成功例も、大いに参考に見てみようという

ことです。

それから、私自身、松本で才能教育の鈴木鎮一先生（二年前に九十九歳で死去）が昭和二十一年に創設された松本音楽院第一期生なんです。鈴木メソッドとして、世界で実証されているように、音楽を始めるのには早ければ早いほどいいですね。子供は楽譜を読むのではなくて、耳から暗記で覚えてヴァイオリンを弾くのです。私は十歳ぐらいから始めましたが、できれば、四歳から六歳ぐらいで始めた方がいい。しかも、音楽教育と言語教育は相関性が高いんです。ですから、英語教育も一、二年生あるいは幼稚園ぐらいからやった方がいいのではないか。子供たちに強制すれば逆に反発したり、拒絶反応を起こして長続きしないものです。鈴木先生の場合、まさに遊びながらヴァイオリンを弾かせ、どんな子供でもパツパツとかヴィヴァルディやモーツァルトなどの曲が弾けるようになるんです。

我が家でもそうですけども、子供を外国で生活させると、小さい子供ほど英語をすぐ覚えますね。でも、忘れるのも小さい方が早い。それをうまくメンテナン스することが重要です。英語教育も、中学の段階でどう改善するか。そうすると今度は、高校の段階でも考えなければなりません。高校の場合、大学入試にも関係するので、



サントリーホールでヴァイオリンを演奏する中嶋学長
(エッセイ集『リヴォフのオペラ座』から)

大学入試の英語をどうするか。それらを総合的に考えないと、せっかく下の方から議論しても、肝心のところで英語教育の改善にならないです。委員の中には、もう高校の今のような英語教育だったら要らないとか、逆に害毒だという先生もいます。それから、大学入試から英語をやめた方がいいのではないかと、とも、文法的な要素に辞書を引いて一生懸命やるといった従来型の英語教育は余り必要ないと…。

どこの大学でも、英語の入試問題づくりには大変、力を入れ時間をかけています。それはそれで貴重かもしれないけれども、しょせんは入試なんです。今、大学入試センター試験がかなり改善されてきていますので、それを使えばよいわけだし、耳から聞いて自分も話すことができるコミュニケーション手段としての英語ということからすれば、TOEFL（アメリカで学ぶ外国人のための英語学力テスト）とかTOEIC（国際コミュニケーション英語能力テスト）を利用する方法もあります。その辺まで含めた議論が進んでいるのが現状です。

——波田小学校の外国人講師は、町が独自に経費を負担して採用していると思うんです。財政負担の面で、市町村長の考え方が大きく影響します。小学校で英語教育を始めるにしても、指導者が必要になってきますね。

中嶋 そうですね。教師の研修制度、リカレント教育が重要になってきます。これは私個人の意見で、まだ全体の意見にはなっていませんが、例えば、教員養成系の大学は教師になる学生が少なくなつて、文部省の方針で定員が削減されています。従つて、教官の定員も削減されて今、教育への情熱を失いがちになっています。それを現場の中学校、高校の先生、やがては小学校の先生をリカレントする形になれば、新しい展望が開けるのではないでしようか。

それから、もっと研修制度を取り入れるべきだと思ひます。先生方が外国へ行つて研修する、あるいは全国の外国語大学の大学院で一年間勉強する。また、日本はこれまで貿易立国で、商社などのビジネスマンが世界で活躍してきたわけです。それらの人たちがリタイヤした後は、生きがいとして小学校に行つて外国のようすを話したり、英語を教える。そういうことも提言に盛り込めれば、と思つています。

外国人講師のALIT(アシスタント・ランゲージ・ティーチャー)も、もっと増やす必要があります。何もアメリカ人とかイギリス人、カナダ、オーストラリア人ではなくて、アジア系の人でもいいのではないか。むしろ、アジア系の方が抵抗なく生徒とうまくやつていけるかも

しれないし、シンガポールだつて香港だつて、英語の上手な人がいますからね。国籍を問わないという方向で大体意見が一致しています。

リーディングよりヒヤリング

——実際、私も中学一年から英語を学んできていますが、外国に出張してもまともな英語は使えません。やはり、日本の英語教育は先ほど言われたようにリーディングが重要視されて、文法とか書く約束ごとを教え込まれるので嫌になつてしまふ面があります。まず、意思を伝え合うヒヤリング教育が重要だと思ひますね。

中嶋 そうですね。余り文法などということをお話せずに、ボキャブラリーが豊富であれば、それをつなぐだけでかなりコミュニケーションできますしね。いままでも、中学校から大学まで十年間、英語を学んでいるけれども、ほとんど自分を表現できない、会話ができないというところに問題がありますね。私自身も、毎日のように英語で会話し、ときには講演もしますが、決してうまい英語とは思つておりません。高校時代はフランス語を勉強し、大学受験もフランス語。それに、大学での専攻は中国語でしよう。英語を正規に余り学んでいないから、それが

逆にいいんです。文法的なことを考えずに、必要に迫られてやった英語ですが、かなり込み入った専門的な話もしてきていますし、CNNやBBCのテレビにも出演することがあります。そういう英語でいいのではないのでしょうか。

b b

b b

キャンパス移転で私大と交流

——東京外国語大学は、明治六年に建学された日本を代表する外国語専門教育の学校なわけですが、先生は九五年、平成七年に第九代学長に就任されましたね。その間、平成九年には創立百周年、昨年秋には独立百周年（建学百二十六年）を迎え、そして今年秋には府中市の新キャンパスに移転が実現します。教育内容についても、学部の語学科制から課程制への移行とか大学院の重点化など、さまざまな改革に積極的に取り組んでおられます。国立大学としての東京外国語大学の将来展望についてお聞かせください。

中嶋 この大学は、起源をたどれば安政四年（一八五七年）に幕府が設けた「番書調所」までいく、恐らく日本で一番古い大学といえます。九段坂下の番書調所には最初、百二十九人が採用され、「番書」つまり外国の書

類を翻訳する、あるいは外国のことを調査するところから始まっています。十五年後の明治五年に文部省が設置され、翌年、「東京外国語学校」として開設されています。まさに、日本の近代化を第一線で担ってきたと言ってもいいと思います。外国のものを受け入れるという歴史でしたが、これからは自分たちから世界に向けて発信していかなければならない。ということになると、従来の外国語大学のあり方そのものも根本的に考え直さないと、新しい時代には太刀打ちできません。

それで、このところ改革を一生懸命やってきました。幸いにして、例えば留学生は毎年六十人前後増えてきて、現在、四千二、三百人の在学生の中で、約一四％の六百十人になりました。留学生が来る大学というのは、それだけ国際競争力があるということです。国立大学全体を見ますと、留学生比率は三％台ぐらいですけれど、一四％というのは国立大学では最も高いと思います。いわば、異文化交流の場としての大学に変えていかなければいけない。そのためには、まず外国語の運用能力を身につける。当然、どこでも英語が通じるよう「英語を学ぶ」ということでなくて、「英語で学ぶ」形にもっていく必要があります。二年前に「ISEP T U F S」（東京外国語大学国際教育プログラム）という短期留学

制度を立ち上げました。これも大変評判がいいんです。

学生は意外に時代に敏感で、幸いにして優秀な学生が来てくれていますが、それでも、どうも国立大学というのは意思決定に時間がかかったりして、社会や学生のニーズに対応できていません。その最たるものは、ITと言われる情報技術の面です。世界の最新施設に追いつかないのですが、新キャンパスにはそうした面でも先端的な機能が導入されます。これからは、外国語ができるからビジネスの先端に立つというのではなくて、国際貢献ができる社会のリーダーになれるような人材を養成したいと思っています。

——新しい府中のキャンパスは、現在の西ヶ原（東京・北区）キャンパスの三倍の広さになり、国際交流会館や留学生日本語教育センターなども収容されます。全国共同利用のアジア・アフリカ言語文化研究所や総合文化研究所などの学内研究機関も移転して、いままでのよ



子供の夢を育てよ
うを合言葉に、教
育の一粒運動を進
める「学園随筆」

うに社会人に向けた公開の語学講座も毎年開かれると思
います。私学との連携について、どう考えておられます
か。

中嶋 まだ具体化していないけれども、ICU（国際
基督教大学）とは、調布飛行場を隔ててすぐ近くになり
ますし、ICUの絹川正吉学長とは懇意にさせていただ
いているので、交流を盛んにしたいと思っています。I
CUは、ご承知のように私学の中では非常にユニークな
大学で、英語はもちろん、言語教育がきちんとしていま
すし、かつてはライバル同士でした。ICUを受けて私
どもの大学を受けるといふパターンが結構あるものです
から、むしろ学生はどちらで勉強してもいいというよう
な形で交流できたら、相互補完ができるのではないでし
ょうか。いまのところ、まだ私個人の考えですが…。

「大学連合」で補完したり連携

——もともと東京外国語大学は、明治三十年代初頭ま
では「高等商業学校」として、今の一橋大学と一緒でし
た。そこから独立して、明治三十二年に「東京外国語学
校」となったことで、昨年、独立百周年を迎えたわけな
んですね。そういう歴史からでしょうか、一橋、東京工

業、東京医科歯科の在京国立四大学が来年四月に「大学連合」を結ぶということになっていきますね。当初は東京芸術大学も入って五大学ということでしたが、とりあえず四大学でスタートすると聞いています。

中嶋 大学改革をしようという気持ちで四大学、五大学の学長の間には非常に強くて、たまたま学長同士で夢を語り合っているうちに、「連合」という形に発展していきました。OB、在校生、マスコミ、財界とか、世間からの期待が大きいものですから何とか実現しようとして、学長同士だけではなくて、副学長、あるいは学部長を交えて、これからどういふことができるかという詰めの話を進めています。ただ、総論賛成でも、各論になると問題がないわけではないのですけれども、何とか実現したいと思っています。

四大学、あるいは五大学は、分野が余り重ならないということがあります。ですから、互いに補充したり連携していけば、縦割りの大学制度を崩していくことができると思うんです。学生たちにとつても、どの大学で勉強したかということよりも、何を学んできたかということが重要になると思います。単位互換や「大学連合」の枠内では転入学なども、一定の比率で自由にしたい。その代わり、仮に外大の学生が東工大に編入して、物理や数

学の成績が低くて卒業できなかったとしたら、それは学生自身の責任である、そういうシステムにしていききたいと思っています。

信州での教育が人生の基本に

——先生は現代中国学の権威で、数多くの研究、論文を世に出しておられます。特に、文化大革命の最中に中国を旅行され、その見聞から天安門事件までを「北京烈烈」（一九八〇年、筑摩書房刊）にまとめられ、第三回サントリー学芸賞を受賞されています。上、下巻千ペーヅに及ぶ大著で、近代化を急ぐ中国の政治、経済、文化、暮らしをレポートした名著だと思います。その「あとがき」に、先生の生まれ故郷である信州・松本にゆかりある筑摩書房から出版されたことに感慨をつづられているのが印象的でした。

中嶋 私は信州に生まれ育って、松本で教育を受けたことを非常にありがたいと思っています。市立松本幼稚園に三年間も通い、園長先生は今、重要文化財になっている開智学校の校長と兼務だった一志茂樹先生でした。一志先生は全国的にも知られた郷土史学者です。それから市立源地国民学校（現・源地小学校）に入りましたが、

近くの薄川の河原で泳いだり石を拾ったり、美ヶ原高原に行つて植物採集をするといった、まさに信州の自然豊かな山野での野外教室みたいなものでしたね。中学は市立清水中学校で、ここでも第一回文化祭の実行委員や全市の中学校対抗陸上で主将を務め、優勝した思い出があります。水彩画で県展や中信展にも入選しました。

県立松本深志高校時代も、当時、全国の高校では非常に珍しいフランス語の授業があつて、東京外大に受験するときはフランス語で受けたんです。サークル活動でフランスの文化と言語を学ぶ「ゴローア協会」(ゴローアは、古代フランス人(ゴール人)に由来)を創設して「とんぼ祭」(文化祭)に凱旋門をつくつて参加したり、山岳部にも入っていました。大学で中国語を専攻するようになったのは、高一のときに父の事業の失敗で代々薬局を営んでいた家屋敷を全て取られたことが原因しています。そうでなかったら、今ごろ松本で医者になるか薬局



国民世論と共に
歩む私学時代を
目指す
「私学時代」

を継いでいたかもしれないけれども、逆境に会つたことで社会に目を開くことができて、中国革命に関心を抱いたというわけです。

——今のお話ですと、すばらしい幼少年期を過ごされたわけで、先生が国際的に大活躍されている「原点」を知ることができました。最後に、21世紀を担う学生たちに対するメッセージをお願いします。

中嶋 今の学生は勉強しないとか、学力が低下しているという意見があるのですけれども、私は必ずしもそうは思っていません。私のゼミの学生は非常にたくましく、例えば、海外青年協力隊に行つたり、国連開発計画(UNDP)に入つて活躍している女子もいます。

一番初めに言つた国際貢献ということに戻りますが、異文化体験をたくさんしてほしい。異文化というのは、それを理解しないと先制的な壁として立ちはだかるけれども、一たび壁を通り抜けると違つた世界が開けてきます。そのためには、やはり言葉、外国語を学んでほしいですね。私どもの大学では、世界二十八カ国、一地域の四十九大学と交流協定を結んでいますし、環太平洋地域の大学間での単位互換などが可能になるUMAP(アジア太平洋大学交流機構)の日本での中心校になっています。日本の若者には、大いに希望を持ってほしいと思つています。